柴崎村の地名をみる

立川と柴崎

「立川村」を含む一帯は、戦国時代には「立河郷芝崎村」と呼ばれていました。「立河」という地名は鎌倉時代にまで遡ることができると考えられています。「立川」という自治体名は、数百年前からあった地名を受け継いだものなのです。

「立川村」は、現在の柴崎町、富士見町、錦町、曙町、羽衣町、高松町、緑町までを範囲としており、このあたりは、明治14（1881）年までは「柴崎村」と呼ばれていました。立川駅南口に位置する「柴崎町」という町名は、柴崎村の中心地であったことを示しています。

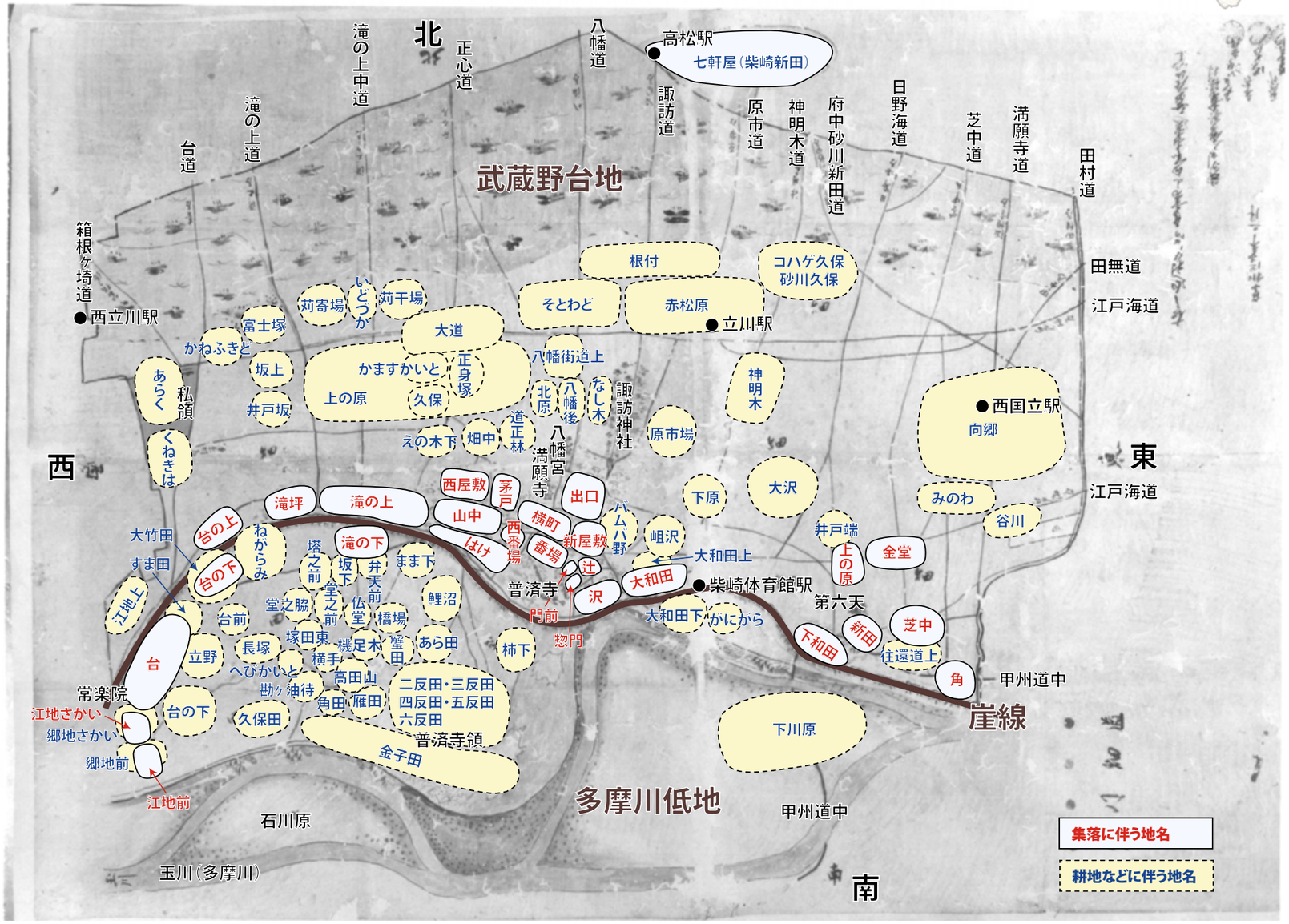
では、「立川」「柴崎」以外の地名はどうでしょうか。柴崎村では、集落や耕地といったより狭い範囲を示す地名も多く用いられてきました。保坂芳春さんの『立川の地名―立川編―』（立川市教育委員会1988年）によれば、江戸時代には集落を指す30余りの地名と、耕地などを指す100余りの地名があったとされています。

『立川の地名―立川編―』にみる地名とその分布

『立川の地名―立川編―』では、柴崎村の江戸時代の地名を、寛文７（1667）年・文政元（1818）年・弘化３（1846）年・弘化５（1848）年・慶応３（1867）年の検地帳、江戸時代後半頃のものとされる「近隣村名」（『諏訪神社所蔵古文書第一集』 立川市教育委員会1984年）、文化７（1810）年～文政11（1828）年に幕府によって編さんされた『新編武蔵風土記稿』、柴崎村の名主だった鈴木平九郎が天保８（1837）年～安政５（1858）年にかけて書き記した『公私日記』などの古文書から拾い集めています。

また、当時の地名の位置を現在の番地に正確に対応させることも試みられました。しかし、地名の目印となっていた塚や古道などは立川飛行場の開設（大正11（1922）年）や市街化に伴ってほとんど消滅しており、両者を正確に対応させることは難しいことが指摘されています。

そこで古文書だけでなく古老からも聞き取りが行われ、さらに普済寺（柴崎町４丁目）や常楽院（富士見町３丁目）、諏訪神社（柴崎町１丁目）などの古刹・古社や、富士塚（富士見町１丁目）などの旧跡を手がかりとして、当時の地名のおおよその位置が推定されていきました（普済寺、諏訪神社、富士塚については、８頁の部会特集もご覧ください）。その結果、集落に伴う地名と耕地などに伴う地名は、右図に記したような分布をしていることが示されました。



この図は、立川市歴史民俗資料館が所蔵している「柴崎村絵図」（享和４（1804）年）に加筆したものです。

富士見町4丁目付近の崖線の様子（平成28年）

崖線（がいせん）とは？

崖線とは、低地と台地、あるいは標高の高い段丘と低い段丘とを分ける連続した崖のことを言います。

古い地名を探してみよう

地名は単なる符号ではなく、そこに住んだ人々が抱いていた歴史的・地理的な感覚、あるいは伝承や信仰の表れでもあります。現在立川市では、古い地名が正式な地名として用いられることはほとんどなくなりました。ですが古い地名は、町会名やお店の名前として、現在でも日常生活の中にみることができます。普段何気なく使っている名前の中にも古い地名が潜んでいるかもしれません。（鳥越）

※『立川の地名―立川編―』は歴史民俗資料館や市政情報コーナーで頒布中です。
また、市内の各図書館でも閲覧することができます。